

## 『嵐が丘』における内と外、個人と社会について

宇田 和子

「詩は池に落とされた石である。その波紋はさざめいて、同心円を描いて外の方へと消えて行く。」① C・デイ ルイスは、エミリ・ブロンテの詩についての論考を、池に投げ込まれた石という比喻で書き始めている。激しき波立ちを思わせる『嵐が丘』という小説を考察する際に、この比喻の状況を援用するならば、ワザリング・ハイツとストラッシュクロス・グレインジという二つの屋敷から成り、それ以外の地は時折り人々の口の上るにすぎないという孤立した状況にあった嵐が丘の地という池は、ヒースクリフという石がリパプールから連れて来られてその中に投ぜられた時、大きな波紋を呈し始めたと言つてよい。注1 池の中には既に、キャサリン、ヒンドレイ、エドガー、イザベラといった石が存在していた。そしてひとたび波動が起こるや、それら静かであった石も動揺を起こし始めた。それぞれの石固有の性質の違いに

より、波紋もまたそれぞれ違っていた。ある波と波はぶつかり闘ぎ合い、ある波と波は揺れを等しくしようとした。打ち合い重なり合おうとしながらそれらの石は、キャシー注2、リントン・ヒースクリフ、ヘアトンという第二世代の石を生み、そしてそれらもまた震動を起こし、小説世界は大いなる揺れと嵐に包まれるのである。

常に嵐が「ワザー」しているという自然環境もさることながら、この小説世界の激しき印象を作り出しているのは、この世界の存在物たるこれらの石たちの性質の激しさに因る所が大きい。「遊びにおいて、キャサリンは小さな女主人を演ずるのがきわめて好きでした。」(五章)とある。「十五才の時、キャサリンはその土地の女王様でした。」(八章)とある。そしてまた、妻が不機嫌になると「ヒンドレイは暴君のようになった。」(六章)とある。こ

の小説にはこのように、王や女王、一般的に言えば支配者のイメージが散見する。ヒースクリフにおいてでさえプロンテは、その素生が知れぬをよいことに「あなたは身をやつした王子にふさわしいですよ。あなたのお父さんは中国の皇帝であり、お母さんはインドの女王であるということがないとは、誰が知りましょうか。」(七章)とネリーに言わしめている。第二世代のキャシーにおいても、エドガーに対して「専制君主」(十七章)であり、あの弱々しいリントン・ヒースクリフでさえ、猫いじめをする「小さな暴君」(二十七章)であり、妻となったキャシーに向かつて、優しい取り扱いはしないつもりであること、彼女の意志を通させはしないつもりであることを宣言している。(二十八章)しかしながら、これらの王、女王、王子、暴君は、安定した支配状況のもとで平和を楽しんでいる君主達ではなく、常に他からの侵略の手に感じており、そして同時に他に対して自己の勢力を拡大し、他者を我が意志のもとに屈服させ、自らが絶対なる覇者とならんとしている君主達である。エミリ・プロンテの叙事詩『ゴンドル』が、推定されるころによれば、A・G・Aという女性と北太平洋の島をめぐる、恋と領土の征服物語であったように、『嵐が丘』という小説も、意志と意志のぶつかり合いの中で、他者の意志を征服して自らの意志を最強のものとしようとしている、我意の世界であると言ってよい。激しき自我の攻防が、激しき小説世界を作り出しているのである。

こう言っている。「邪悪なる人々を罰するのは神の仕事です。私達は許すことを学ばなければなりません。」(七章)そしてまたネリーは「あなたは憐れみという言葉が何を意味するかわかりますか。」(十四章)と言って、ヒースクリフに憐れみを説いている。このようなネリーは、キリスト教の教えに従った考え方の持ち主であろう。ヒンドレイが死んだ時、葬儀が見苦しくないように貧弱ではないようにと、ネリーは葬いの準備に出かけて行く。このようなネリーは、世間の常識に従おうとする人であろう。ヘアトンが生まれた時、彼女はそれを「古きアーンショーの血筋の最後の者の誕生」(八章)と表現している。このようなネリーは、家柄や階層を意識した社会人であろう。ネリーにおいては、一般通念が網の目をめぐらしている。彼女に我が意志を通さんとする所がないわけではない。しかし彼女が我意に従うのみでなく、多くの人々の行動規範とされているものに従う人であることを考えてみると、彼女の語りは独断や偏見から比較的自由であり、歪みの少ないものであると推定できる。さらに作者エミリ・プロンテは、「あなたは召使一般が考えるよりも、もっと多くものごとを考えて来たのだからと思えますよ。愚かしくつまらない事に入生を無駄にする機会がなかったものだから、あなたは考える能力を自然に養わされることになったのですね。」……「私はきびしい仕込みを受けて来て、それは私に知恵を教えてくれました。そしてロックウッドさん、私はあなたが想像するよりもたくさん本を読んで来たのですよ。」(七章)と、ロックウッドとネリーにことさらに語らせている。これは、ネリーが信頼するに足るだけの教養を持った人であることを読者に明示し、彼女の語りに信

憑性を与えようとしたためであろう。注3 かくなる人物ネリーの語りは、さらにロックウッドによって語り直されている。彼は都会人である。そして、嵐が丘で起きている事件の中へ巻き込まれるかのごとき様子を示すことがありながらも、結局は第三者であり続けコマンティターで終わっている。都会人が語るることによって、嵐が丘の地方性・孤立性がより強く感じられるという効果が生まれていることも忘れることはできないが、ロックウッドの口は、小説の語りにさらに客観性を加えている。ネリーという事件の当事者の語りが、外の異質世界に属する人間というフィルターを経た後の語りを最終形態として、読者に呈示されることとなっているからである。

客観的で信頼できる語りの構造を通して見られる、自我強き人々の波紋の動きには、重なり合おうとするものがあつた。キャサリンとヒースクリフである。ヒースクリフがアーンショー氏によって連れて来られて程たためうちに、彼らは「大変仲良く」(四章)なつていた。そして「彼女は非常にヒースクリフを好んでいました。彼女に対する最大の罰は、彼女をヒースクリフから離しておくことでした。」(五章)という状態であつた。そして彼女の主たる楽しみの一つは「朝、荒野の中へ駆け出して行き、そこで終日過ごすこと」(六章)であり、自然の中で二人で居ることがいかなる罰をも忘れさせてくれる幸福なのであつた。

幼児期にあつた二人が荒野の中で、自分達の自然の性向に従つて重なり合ひの状態を維持できたとしたならば、彼らの生活が破壊的動揺を呈することはなかつたであろう。しかし彼らの上には、やがて分離の手が及ばざるを得なかつた。「ああそれはきれいだ

つた。真紅のカーペットが敷かれたすばらしい部屋だつた。そして真紅の覆いをした椅子とテーブルがあり、金で縁取りした天井は真白だつた。ガラスの滴の雨が天井から銀の鎖で垂れ下がつていて、小さな柔らかな細蠟燭できらきらいつていた。」(六章)常に風に吹きさらされているドイツに住む子供達が、木立ちによって風から守られているグレインジというお屋敷の室内をこのように窓から見た時とは、あるいはまた、朝は三時四時から起きて働き、台所に続く石床の居間で生活する独立自営農民の家の子供達が、行政長官を勤める農業資本家の家の中を覗き込んだ時とは、自然の子らが洗練された文明の世界を垣間見た時を意味している。そしてこの時が、二人の別れの時なのであつた。

犬に噛まれたキャサリンと共に室内に入れられたヒースクリフに対する、リントン家の人々の品定めを言葉で見つめることに興味がある。「ここに小さな男の子がいますが、全くの悪党と云つた顔つきですよ。……黙れ、この口汚い泥棒め。」(六章)とは、二人を捕まえた下男の最初の言葉である。「これは男の子でしかない。でもこの悪者はそんなにもはつきりとしかめつたらしているよ。」とはリントン氏の第一声である。「ミス・アーンショーが、ジプシーと一緒に野原を漁り歩いていたんですって！」とはリントン夫人の言葉である。「小さなインド人水夫、あるいはアメリカ人かスペイン人の追放者だよ。」とはリントン氏の次の言葉である。初めて見たヒースクリフに対して、悪党、泥棒、悪者、ジプシー、外国人、追放者という所見が下されている。これらの言葉は、リントン家の人々によってヒースクリフが、社会の枠を逸脱したものであるとして、また安らいで住みうる場

所を持たない、コミュニティからの被疎外者として認識されたことを示している。さらに、リントン氏が「彼は（ゴブ）」と言わず「それ（エナ）」と言っていることにより、ヒースクリフが人間の枠の中にさえ居ないものとして、軽蔑的に受け取られていたことが感じられる。枠組の内側に居るリントン家の人々は、係わり合いの範囲の外にあるべき存在であると、ヒースクリフを判定したのである。かくなる判定のもとに、その土地の第二の家柄たるアーンショー家のキャサリンは家の中へ、そしてヒースクリフは家の外へという、内と外の分離がなされることとなった。屋内に留め置かれたキャサリンは、足を洗われ髪を梳かれ飲み物とケーキを与えられる。ヒースクリフを窓の外に置いたまま、彼女のみが洗練された社会の中への洗礼を受けたのであった。

自然の中で一つであった彼らを内と外へと引き裂く力が、ただ単に外部の者の手によって加えられたのであったなら、彼らはなおも抵抗し結び付いていたかもしれない。しかし二人の結合は、内なるものの裏切りによっても崩壊せざるを得なかった。すなわち、結婚の相手としてエドガーを選ぶというキャサリンの行為である。求婚受諾の理由をネリーに問われて答えるキャサリンを見ていることも、興味ある事実を我々に呈示してくれる。「ミス・キャシー、どうして彼を愛しているんです？」（九章）というネリーの問いに対し、「なぜなら彼はハンサムと一緒に居て楽しいから。」「なぜなら彼は若くて明るいから。」「なぜなら彼は私を愛しているから。」「彼はお金持ちになるでしょう。そして私は、このあたりで一番立派な女性になり、そんな夫を持っていることを誇りに思うようになるでしょう。」と答える。続けて彼女は、

ヒースクリフが家を飛び出す引き金となった「今ヒースクリフと結婚することは、私を落としめることだわ。」という言葉を述べる。ハンサム、楽しい、若い、明るい、愛されている、金持ち、立派、身を落とさないという理由を、キャサリンは挙げていく。最後の三つは金であり身分である。愛されているとは、若き女性が求婚を受け入れるために大前提とする事柄であろうから、当然の事としてしまってもよい。だが、ハンサム、楽しい、若い、明るいとは、この作品においてどのような意味を持っているのか。

この頃のヒースクリフは、牧師による教育を奪われ、長時間の肉体労働を強いられ、知的好奇心を失ってしまった。そして陰鬱な性格に変わってしまった。ネリーの言葉によれば、精神的墮落に対応するかのようには外見も落ちて行き、汚れた服装をして、だらしない身のこなしと無知なる顔つきを呈していたという。このようなヒースクリフはキャサリンに「私にいつもあなたと一緒に居なさいとも言うの？……どんな良い事を私がそれから得るとも言うの？あなたが何を話すとも言うの？」（八章）と言わしめている。この状況からすると、ある人間の知性と教養は外見に表われるものであること、明るい性格と知性と教養は、楽しい交わりを生むものであることがわかる。この作品においては、性格や知性や快・不快が、外見と一直線に繋がられて、同範疇に置かれているのである。してみると、ハンサム、楽しい、若い、明るい、金持ち、立派、身を落とさぬというキャサリンの挙げた理由は、外見・教養、金・財産、地位・身分に分類できることがわかる。そしてこれらの理由は、彼女が結婚において、外面的なもの世間的なものを選択したことを示している。彼女は結婚にお

いて世間的価値を身に付けようとしているのである。

しかしながら彼女は、エドガーを愛していると言った舌の根も乾かぬうちに「私の魂の中で私の心の中で、私は間違っていると確信しているの。」（九章）と言い、ヒースクリフについて「彼は私以上に私なのよ。魂というものが何でできてきているにせよ、彼と私の魂は同じで、リントンと私の魂は、月光が稲妻と違っているがごとく、霜が火と違っているがごとく異ったものだわ。」（九章）と呼ぶ。この時彼女は、自分が自らの魂を欺き、異質なる精神と結び付こうとしていることを知っていた。彼女は今、自らの内なる声に背き外なるものの眼差しに取り入ろうとしている。自己の情熱よりも世間体を選んでいる。つまり彼女は、結婚において内よりも外を、個人よりも社会を採ったのであった。ヒースクリフとキャサリンの渾然一体は、まず外なる者達によって内と外に隔てられることによって、次に内なる者によって外を選択されることよってという、二度繰り返される内外構造によって、崩壊を決定的なものとなしたのであった。

キャサリンによる選択が、世間というものの存在を我々に気づかせてくれた時、我々は今少し、結婚と世間・社会の関係について考えてみる必要を感じる。ジェイン・オースティンの『自負と偏見』は、このような書き出しで始まっている。「大きな財産を持つている一人者の男は、妻を欲しがっているに相違ないというのが、世間一般に認められている真理である。」②この真理に基づいてミセス・ベネットは「ええあなた、一人者ですよ確かに。大財産を持った独身の男。年に四千か五千ポンド。うちの娘達にとって、なんてすてきなことでしょう。」と、娘達の誰かをその

お金持ちに嫁付けようとしている。金や財産は、結婚における大きな魅力である。ディケンズの『ドンビーと息子』において、娘エディスがドンビー氏の後妻に決まった時、クレオパトラと渾名される彼女の母親は、エディスに向かってこう言っている。「私達はお前に良い地位を確保してやろうとあらゆる努力をして来たのだよ。：それがお前の人生だった。そして今、お前はそれを手に入れたんだよ。」③クレオパトラにとって、結婚は地位獲得である。サッカレーは『虚栄の市』の中で、ベッキーが初めてアミリアの兄に会った時に「彼女が心の中で、この太った伊達男を征服しよう」と決めたとして、彼女を責める権利は我々にはない。」④と述べ、さらに続けてこう言っている。「デイナーのために着替えている時に、そしてアミリアに彼女の兄が大変にお金持ちかどうかを尋ねた後に、ベッキーが自分のために最も壮麗なる空中楼阁を打ち建てたことは確かである。彼女はその女主人で、そして夫君の方はやや後方に覆んでいた。：：：彼女は無数のショール、ターバン、そしてダイヤの首飾りで自分を飾り立てた。」ベッキーにとつて結婚とは、お金を得て贅沢で華麗な生活をするための「征服」であるらしい。ギヤスケル夫人は『メアリー・バートン』の中で、幼な友達ジェムに親しみを感じていながらも、若き工場主ハリー・カーソンと結婚できると思った時の、貧しき娘メアリーの心中をこう描いている。「私ジェムとは別の人ハリーと婚約しているも同然なんだわ。しかもジェムよりもずっとずっとハンサムなハリーとね。ただそれにもかかわらず、私はジェムの顔が一番好きだと感ずるわ。好きは好きでどうしようもないのだから、でも私がハリー・カーソン夫人になったら、もしかすると私は、

ジェムに何か幸運を与えることができるかもしれない。」⑤ ⑥  
して彼女は「ある日レイディになり、レイディにふさわしいすべ  
ての上品で無益な事をやっているという考えにふけり楽しんでい  
るのであった。このようなメアリーに対しギヤスケル夫人は「そう、  
メアリーは野心的であった。だから、カーソン氏がお金持ちで紳  
士であるという事で彼を敬遠するなどということはなかった。」  
とコメントを加えている。メアリーもまたキャサリン同様、レイ  
ディになるために幼な友達を捨てようとしている。そして捨てる  
ことによって幼な友達に何かできるかもしれないと考えて、自己  
を正当化しようとしている。アンソニー・トロロプは『ウォーデ  
ン』の中で、エリナがなぜジョン・ポールドを愛したのか、それ  
は若き娘一般に通ずる理由であるとして、こう列挙している。

「彼は若き女性の心に触れそうなすべての資質を持っている。彼  
は勇敢で熱心でおもしろい。がっしりしていてハンサムである。  
若くて熱意にあふれている。彼の性格はすべての点において良好  
である。妻を養うに十分な収入を持っている。彼は彼女の父の友  
人である。そして何にも増して、彼は彼女を愛している。それな  
らばなぜ、エリナ・ハーディングがジョン・ポールドに引き付けられ  
ないことがあるのか。」⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓  
の挙げた理由は、キャサリンの挙げた理由とほとんど同一である。  
このように十九世紀中葉までの他の作家達における女性と結婚  
をながめてみると、キャサリンがいかにこれらの女性とよく似て  
いるかに驚かざるを得ない。<sup>注4</sup> 彼女も他の女性達と同じように、  
外見に引き付けられ、お金や地位を得ようとしているのである。  
夫の金を、ヒースクリフを向上させるための資金にするのだとい

うこじつけをしつつ、彼女はその地方の第二の家柄から第一の家  
柄へと社会的階梯を登ろうとしている。いや、ヒースクリフが業  
生の知れぬ人間であって、彼と結婚することは身を落とすことで  
あるという考えに重きを置けば、階梯を登らぬまでも釣り合いの  
取れた結婚を考慮していると言うことができる。「十分に釣り合  
いの取れた結婚が、多くの心のわずらいを持つことはない。」と  
は、一九四八年に出版された警句集、マーチン・タッパーの『こ  
とわざ哲学』の中の一項目である。⑦ 警句集が、その時代の一般  
の人々に教え諭す機能を持つものであることを裏返せば、それは  
我々に、その時代の一般の人々が実現したいと望んだり実現すべ  
きであると考えていた、理想的な姿を見せてくれるものとなる。

とすれば、釣り合いの取れた結婚を選んだキャサリンは、社会一  
般の理想形に服しようとしていたと解釈されることになる。  
シャーロット・ブロンテは、『嵐が丘』の一八五〇年版に付し  
た「伝記的紹介」の中で、エミリとアンについて「彼女達は二人  
のひっそりとした女性達でした。完全に孤立した生活が、彼女達  
に隠遁した生活様式と習慣を与えていたのです。」と述べ、そし  
て「序文」の中で「エミリは、尼僧が村の人々を知らないとはほ  
同じくらいに、自分がその中で暮らしている農夫達についての実  
際の知識を持ってはいませんでした。」と書いている。エミリが  
一家の中でも殊更に世間と交わらぬ生活を送っていたことは知ら  
れている。そして、ブロンテの想像力が英国の土着的な力の産物  
であるとしながらも、ディヴィット・セセルは「彼女はヴィクトリ  
ア朝英国を特徴的に表わしている人ではない。サッカレーやディ  
ケンズ、トロロプやギヤスケル夫人におけるような一般化は、決

して彼女に当てはまらない。」⑧と述べている。そしてまたF・R・リーヴィスは『嵐が丘』を、伝統から外れるもの「スポート」⑨と評している。シャーロットおよびこれらの批評家の言葉を合わせれば、没世間的な生活を送っていた一女性による脱世間的な小説という見方が出て来よう。そして実際、この小説を読む我々の耳に響く主調音は、広大な空間に遊ぶことを願う魂が打ち鳴らす情熱の響きである。だがしかしこれらのことは、この小説における社会の存在を否定するものでは決してない。いやむしろ、我々がキャサリンの結婚を考えてみるに、彼女の結婚に対し決定権を持ったものは世間意識であり、彼女はヴィクトリア朝一般の理想形に従おうとし、ジェイン・オースティン流の社会的尊敬を行動の規範とする生活様式に付こうとしていると言える。

『嵐が丘』において社会というものを考える時に、アーノルド・ケトルのように、『嵐が丘』が十九世紀資本主義社会の圧迫と緊張と対立を表わすものであるとし、ヒースクリフの中にヴィクトリア朝の資本主義社会によって肉体的・精神的に落としめられた者の反逆を見出すまでのこともない。⑩ テリー・イーグルトンのように、二つの家に独立自営農民の没落と農業資本家の隆盛という歴史的事実を対応させ、理想というものが神話の中でしか生きることができなくなってしまうとして、資本主義社会に対し嘆息するまでのこともない。⑪ この小説において社会というものを考える時に、歴史や経済やイデオロギーにまで目を広げずとも、生活に密着したところの、財産、地位、身分、そして社会的装備 (social paraphernalia) の一つである教養といった社会生活の面において、社会というものが存在していると言っ

ことができる。

ヒースクリフの復讐の方法をみてみれば、この社会意識は再び明らかとなる。ヒンドレイに対する復讐は、彼の家・金を奪うこと、酒と賭博の生活を助長し、伸びた髪の毛や乱れた服装に落とすことである。エドガーに対する復讐も土地・財産を奪うことであり、そしてエドガーはキャサリンの死を契機に、行政長官という家代々の職を辞するに到っている。イザベラは財産収奪のための手段とされ、ヒースクリフの妻としてハイツに住むことになった時には、召使も部屋も与えられず「薄汚い女」(十四章)とされてしまっている。キャシーおよびリントン・ヒースクリフも財産獲得のための道具であり、ハイツに住むキャシーからは本が奪われ、ロックウッドが初めて見た時の彼女は、粗野の中で不満を抱いているが半ばあきらめてしまっている陰鬱な女性である。ヘアトンからは、本来彼が相続すべきであった財産が奪われてしまっている。労働者の地位に落としめられ、文字も読めず無知な表情を浮かべ、けだものかと言わしめる生活を送っている。キャサリンがエドガーを選んだ理由は、金と財産、地位と身分、外見と教養であった。ヒースクリフによる復讐を前記のように列挙して考えてみると、彼の復讐がキャサリンの挙げた三つの理由にびたりと合致して分類できるものであることに気づく。彼の復讐もまた社会的なものなのである。そしてさらに我々は、同じ復讐と言ってもホーソンの『緋文字』における復讐の過程が、もっぱら牧師の魂の葛藤にあるという心理的なものであることを、そしてエリザベス朝・ジェームズ朝における多くの復讐劇が、恨みに思う相手を殺害することに、その復讐の方法を置くという肉體

的なもの注5であることを頭に浮かべると、我々はなおのこと、ヒースクリフの復讐が社会的なものであったと感ぜざるを得なくなる。

そしてさらに、復讐におけるこの社会性を、作者エミリ・プロンテ自身が意図的に出そうとしていたと思われる。行方を暗まして約三年の後、ヒースクリフがかつての人々の前に姿を現わした時、ネリーが初めて十分にヒースクリフの様子を描写するのは次のような言葉によってである。「いつのまにか背の高い強そうな恰幅のいい大人になっていました。……そしていかにも賢そうでした。野蛮人にはあんなに愚鈍だったなごりは少しも留めていませんでした。野蛮人のような荒々しさが、いまだにそのしかめた眉や、陰鬱な熱情に燃える目などに残ってはいましたが、それは目立ちませんでした。その態度には威厳さえあり、優雅というにはあまりにもきびしすぎましたが、粗野な所は少しもなくなっていました。」(十章) 荒々しさが残るとか優雅というのではないとか言って、完全な変貌から来る唐突さを用心深く避けているが、ネリーの目は、ヒースクリフが立派な体軀になったこと、知的になり洗練されたことにまず引き付けられている。これはヒースクリフにおける外見・教養の面での変容である。次に、エドガーにおけるヒースクリフへの反応を見てみると、ヒースクリフが戻って来たときと告げられた時、エドガーは咄嗟に「あのジブシー、あの野良働きの小僧が来たんだって？」(十章)と呼ぶ。ところが実際にヒースクリフが室内に招じ入れられた時、彼はヒースクリフの変わりぶりに驚き「さっきは野良働きなどと簡単に片づけていたその男に対して、どういふふうに口を切ったものか迷ってしまつて、ちょっと言葉も出なく」なり、そして、「掛けたまえ、

きみ(sir)。」とサーで呼びかける。野良働きの小僧からサーへと、ヒースクリフにおける地位・身分の面での変化である。

そしてまた小説の冒頭において、ロックウッドはネリーから、嵐が丘の家の住民達について概略の説明を聞き始めるが、今や両屋敷のあるじとなったヒースクリフに対する説明の第一は「お金はありませんとも！どれくらい持っているか知れやしませんよ。それに年々ふえてゆくんですからね。」(四章)というものであった。これはヒースクリフにおける、金・財産の面での変化である。ヒースクリフに対する描写が行なわれる時に、それがまず何よりも先に、お金と身分と知性に向けられていることは、プロンテが意図的にこれらの項目を読者に呈示しようとしていたことを表わしている。

C・P・サンガーは、一九二六年に出された『嵐が丘の構造』という小冊子の中で、この小説が決して想像の赴くままに書かれた奔放な小説ではなく、その正確なる年代の推移において、その家系の美しい対称性において、地形や法律に関するその適合性において、きわめて綿密に計画された意図的な小説であることを示し、『嵐が丘』に対する評価を新たなものとした。<sup>②</sup> 我々が今、キャサリンの挙げた三つの理由と、ヒースクリフの復讐形態、そして彼自身の変貌を並べてながめてみると、これら三つのものが結婚における社会的三項目に対応していること、復讐を通してヒースクリフは、これら三項目を他人から奪い自分のものにするという行為をなしていることに気づく。エミリの社会意識は、時間や家系における同じ正確さと几張面さを持って、作品の中に展開されているのである。そしてこの社会意識は、常識人たるネ



リーの口を通して読者に告げられるが故に、歪みのないものとなる。さらにこの社会意識は、第三者たるロックウッドを通過せられてることにより、客観性をも加味されている。二重の語り的手法も、社会性を表出するための公正な座標軸を設定するという意図のもとに生み出されたものであったであらう。

正統なる英国人として通用させる容貌や富や家柄や教養を持たぬが故に外へ出されたヒースクリフは、締め出された社会へはいるため、その社会が良しとする価値を身に付けようとしていた。社会的なものである彼の復讐は、我々が先に見た内と外の枠組と絡み合ってくる。すなわち彼の復讐は、ある社会の内なる者となるために、外なる者(他人)から内なるもの(彼らの本来の所有物を奪い、自らの内に外なるもの(自分の所有物ではなかったもの)を取り入れること、ということになる。

＊

収奪は一つ一つ成功しており、復讐は着々と進行しつつあった。だがしかし、復讐の止めの鉄槌は振り降ろされたであらうか。ヒースクリフは、全嵐が丘世界の覇者となったであらうか。いやヒースクリフは、願望達成の最後の点において、復讐完遂の意欲を失ってしまうのである。そしてこれは、我々が内と外の問題を復讐と絡み合わせた時、当然に起こるべき結果であったと思われる。キャサリンの結婚とヒースクリフの復讐における社会性は、その裏面に個人の有りようという内的な問題を伴っているものであるからである。この作品の中に内と外の見出し、外なるもの

たる社会という観点から結婚や復讐を見て来た我々は次に、登場人物を内側から——精神面からながめてみることにしよう。

熱病から回復した時、キャサリンはネリーに自分が嵐が丘のベッドに居た夢を見たと言っている。「なんて不思議なんでしょう、私の人生のこの七年間がまるまる空白に思えて来たの。七年間が存在していたということさえ思い出せないの。私は子供だったわ。父が埋葬されたばかりで、そして私の悲しみは、ヒンドレイが私とヒースクリフの間に命じた分離から生じて来ていたの。……でも考えてみれば十二歳の歳で、私はハイツから、すべての幼い頃の親しきものから、そしてその頃のヒースクリフ、つまり私のきわめて大切なもの(Hyacinth)から引き離され、一足飛びにリントン夫人に、スラッシュェクロス・グレインジの奥様に、見知らぬ人の妻に変えられてしまったのだわ。あの時以来私は、自分の世界だったものからの放浪者、追放者なのよ。」(十二章)キャサリンのこの言葉は一挙に二つのことを明らかにしてくれる。一つは「きわめて大切なもの、すべてにおける私のすべて」たるヒースクリフと別れていることは、「人生が空白になる」ことであって自分を失うことであること、今一つは、エドガーと結婚することは、「放浪者・追放者」となることであって自分の存在する場所を失うことであるという二つである。まとめてみればキャサリンは、ヒースクリフではなくエドガーをという世間的な結び付きにおいて、自己そのものおよび自己の所属という、二重の自己喪失を我が身に招くこととなっていたのである。

自己喪失という新しい情況が我々の視野の中に浮かんで来た今、我々はそれがどのようなものであるか、少し考えてみねばならな

い。「どうして君は僕を軽蔑したんだい。どうして君は自分自身の心を欺いたんだい、キャシー。僕は慰めの言葉は一言だって持ってやしない。君は当然の報いを受けているんだ。君は自分自身を殺したんだよ。」(十五章) 自己喪失は死である。「あの時以来私は、私の世界だったものからの放浪者・追放者なのよ。お前は私がのたうち回っている奈落の底を、ちらりなりとも想像することができるとしよう。」(十二章) 自己喪失は地獄へ落ちることである。「私を最もうんざりさせるものはとどのつまり、この打ち壊れた牢獄なのよ。私はここに閉じ込めておかれることには飽き飽きしてしまつたわ。」(十五章) 自己喪失は牢獄である。

結婚承諾の時点から、それが自己の魂に反するものであることを知っていたキャサリンにおいては、自己欺瞞の引き起こす疎外から来る、死、地獄、牢獄のイメージが繰り返し表われる。そして彼女はそれらの責め苦に喘ぎ、その苦悶から逃れ出ようとする。「ああ私は燃えている。外へ出たいわ。もう一度子供になりたいわ。半ば野蛮人のようになって、そして頑丈で自由になって。どうして私はこんなに変わってしまったのかしら。どうして私の血は、ほんの二、三言を聞いただけで激情の地獄へと走ってしまうのかしら。あの丘の上のヒースの中にもう一度立つことができれば、私はきっと自分自身に戻れるわ。もう一度窓を大きく開けて。開けたままにしておいて。」(十二章) すなわち、自分自身に戻するために幼児期を恋うるのである。自然の中でヒースクリフと共に居た少女の頃を回復することを願うのである。そしてまた「入れてちょうだい。入れてちょうだい。……家へ帰って来たのよ。

荒野で道に迷っていたのよ。……二十年間、二十年間宿無しだったのよ。」(三三章) というように、自分の家に戻ることを願うのである。

本来は自分のものではない富や財産を手に入れようとする事において、ヒースクリフは自分を欺いていたかもしれない。しかし彼は、我が魂、我が命と呼ぶキャサリンと一体になろうとするという方向において揺らぐことはなかった。それだけにヒースクリフには、自己欺瞞の引き起こす苦しみは少ない。しかしその彼もやはり「僕の未来は二つの言葉に尽きる。死と地獄だ。キャサリンを失った後の僕の生活は地獄だ。」(十四章)と語り、「子供の頃やったように、かわいい頭を同じ枕の上に乗せていたりさえる。」(三十章)と、今、しかと目にしようとするキャサリンの幻の姿を、幼児期における融合状態の中で語っている。

黄金時代たる幼児期とそれに続く自己喪失期、および自己喪失の中で過去と家を恋うるといふパターンは、それほど明確ではなく若干の変容をきたしてであるが、他の人々においても認められる。

キャシーについて考えてみる。ネリーは、ヒンドレイの死後の十二年間が自分の人生の最も幸福な時期であったと語り、その語りにもすぐ続けてキャシーの成長ぶりを語っている。であるからネリーの幸福な時期とは、キャシーの幸福な時期と一致するものであろう。美しく高く、激しくはあったが優しく、我は強かったが聡明であった。この幸福なるキャシーの少女期に影が射し始めるのは、彼女が十三才になった時であらう。十三才になった時、彼女はそれまで自分が知っていた唯一の世界であるグレインジから外へ出て、ハイツの存在を知ったのであった。そこにおいて彼女

はヘアトンと出会い、彼が自分の従兄であると知らされるといふ  
衝撃を味わっている。十六才の誕生日には、彼女はヒースクリフ  
に「捕えられて」(二一章)しまう。彼女の上に落ちた影が完全  
に彼女を包み込むのは、リントン・ヒースクリフと結婚するよう  
にと、ネリーと共にハイツに閉じ込められた時である。「すっ  
かり閉じ込められた (imprisoned) のを知って」(二七章)  
ネリーはリントン・ヒースクリフに脱出の援助を求めている。こ  
の時のリントンは既に死に近き身体であった。そしてキャシーの  
父エドガーも、あと数日の命であった。捕えられたキャシーの上  
には死もまた色濃い。そしてキャシー自身、リントン・ヒースク  
リフが死んだ時には「彼は今や安全です。そして私は自由です注6  
でもあなたは私をそんなに長く一人で死と闘わせておいたので、  
私はただ死しか思ったり見たりすることがありません。私はまる  
で、自分が死そのものであるかのような気がするので。」(三  
十章)と語っている。彼女は牢獄と死の中に置かれたのであった。  
「見てごらんさい、小さなヘアトンを。彼は暗いものなど何  
も夢見てはいませんよ。彼は眠りの中で、何と幸福そうに微笑ん  
でいることでしょう。」(九章) このように幸福な眠りを呈す  
る幼きヘアトンは、幸福の中にあつたであろう。しかし彼が五才  
の時、ネリーの手から離されてヒースクリフの手中に残された時  
に、ヘアトンにおける翳りの時代が始まる。文字を習い始めてい  
た時からわずか十ヶ月後にネリーがヘアトンを見た時、彼は呪い  
の言葉を吐き石を投げつける、もじやもじや頭の少年に変わって  
いた。「さあこれで、お前は俺のものだよ！木をねじ曲げるよう  
な同じ強い風にあたって、この木もまた他の木のように曲がりく

ねらないものかどうか見てみよう！」(十七章)と言うヒースク  
リフのもとで、身体のみは頑丈に育って行くが、読み書きも教え  
られず、悪しき振る舞いを正されることもなく成長し、「決して  
生まれつきの馬鹿ではない」(二一章)のに、自分の粗野と無知  
に誇りを抱く若者となつてしまつてゐる。自らの継ぐべき家がヒ  
ースクリフに乗っ取られたことも知らず、野良着を着た召使の地  
位に甘んじてゐる。知性においても家系・財産においても、本来  
の姿を失つてゐるのである。

パターンはさらに他の人々にも認めることができる。ヒンドレ  
イは家・財産を失ひ、酒の中に正気を失つてゐる。そしてエドガ  
ーにおいては、亡くなつた時に「大変に若く見えた」(二八章)  
とは、そして何の苦しみもなく「至福に満ちて死んだ」とは、幸  
福な過去への帰還の一変形であろう。イザベラはヒースクリフと  
結婚するや、自分が「私の喜ばしき家」(十七章)から離されて  
いることを嘆いて、「地獄の地」(十七章)よりも悪いとする風  
が丘の家からグレインジへと逃げ帰つてゐる。ロンドン近くで生  
まれ育つたリントン・ヒースクリフは、ヒースクリフの手にかか  
つた時、自分自身を信ずることができなくなる。そしてキャシー  
に対し、「ママがやってくれたように」(二二章)長椅子に座つ  
て膝に頭を乗せてくれることを頼み、結婚した後でさえキャンデ  
イーをしゃぶつてゐるといふ、幼児期への退行のうちに一生を終  
えてゐる。この小説には、死、地獄、天国、牢獄、閉ざされたド  
アや窓注7のイメージが散見するが、登場人物のほとんどすべてが、  
自己を疎外されて幸福なる過去や家を恋ひ求めていることを考え  
てみれば不思議なことではない。そしてまた我々は、人々が本来

の自己を失ってしまった時期とは、ヒースクリフによる復讐の手が及んでいる時期と一致していることに気づく。復讐と自己喪失は重なり合っている。自我・所属という内的なテーマは、社会的な復讐のテーマと、ここで絡み合わされているのである。

ウォルター・E・ホートンが『ヴィクトリア朝人の精神構造』の中で、「家は人がかつて平和であった場所となり、子供時代は真実が確としていて疑いが未だ知られていなかった、祝福された時となった。ヴィクトリア朝の文学には、家と子供時代を恋しく思うという場面が表われる。」<sup>⑭</sup>と言っているがごとく、自己喪失の中にある『嵐が丘』の人々は、かつての家と過去への回帰を願った。だがしかし過去は、彼らに安らぎの地を与えうるものであったらどうか。レイモンド・ウィリアムズは『田舎と都市』の中で、「歴史を振り返ってみると、我々はいつの時代においても、美しき田園が失われたことを嘆き、古き良き時代のことを言い続けている。であるから我々は、古き良き時代を得ようとすれば過去へ過去へと求め続けて行くことになり、ついにエデンにまで遡らざるを得なくなる。」と述べている。<sup>⑮</sup> エミリー・ブロンテにおいて、彼女の人物達が回帰しようとしている幼児期というものをよく見てみれば、それは内から蝕みを呈して行き、彼らの願う黄金の時もまた、実は、手にしようと近づくところまで遠のいてしまう逃げ水となってしまふことがわかる。ブロンテの中の子供時代も、内奥は、不安と翳りのあるものである。「この世のどんな人も、穢れなき話の中で彼らがやっていたほどに美しく天国を描いたことはなかったでしょう。」(六章)とネリーに言わしめたヒースクリフとキャサリンからは、この時既に父が失われていた。

生まれたばかりのキャシーは顧みられぬ子供であった。幸福なる十二年間も、グレインジ内での幸福にすぎなかった。外の世界との接触を排除することによってかろうじて成り立つ平安である。

小さなヘアトンの眠りの中の「甘き微笑」(九章)がネリーによって述べられるや「そう、そして何と甘く彼の父は一人で呪いの言葉を吐いていることでしょう。ヒンドレイが丁度あの小さな子くらいだった時のことを覚えていてでしょう。同じくらい幼くして無邪気だった時のことを。」とキャサリンがやり返す。幼児の眠りは大人の呪いに重ね合わされ、幼さと無邪気さは酒と賭博に明け暮れる地獄の生活を予告している。ギマトンへの途中で道しるべの所まで来た時、ネリーはヒンドレイの幼い頃の姿を見たような気がする。そして彼女は、それがヒンドレイの死の前兆なのではないかという不安に駆られて、急遽嵐が丘へ向かう。するとそこで彼女は、ヒンドレイと見間違ふ小さなヘアトンの姿を目にしたのだった。この経緯においてヒンドレイの幼児期は、即そのまま死となっている。そして次に彼の死は、五才のヘアトンの上に重ねられている。幼き眠りの中に知恵の汚濁を見て取ったブレイクにおけるように、ブロンテの幼児期も完全なる無垢や幸福とは言い難い。であってみれば子供の頃に戻ったとて、それはブロンテの人々に全けき幸福を与えるものではあり得まい。

幼き時代は蝕まれ、かつての家に父は亡い時、現在における疎外の苦しみに呻く人々はどこに救いの道を求めたらよいのであろうか。当然のことながら残された方向は一つ、未来しかない。三章においてヒースクリフは「今というのが正に、私の敵の代理者達に復讐すべき時なのだろう。やろうと思えばできるのだ。そ

して誰も私を妨げることはできません。だが復讐したとてそれが何の役に立とうか。」と、復讐する気持ちを支ってしまったことを述べている。ヒースクリフのこの述懐は「ヘアトンおよびキャシーの目と、キャサリン・アーンショーの目が似ていることが、ヒースクリフの心の刃を取り去ったのだと思います。」というネリーの言葉に続いており、ヒースクリフ自身の「五分前に、ヘアトンは人間ではなくて、私の若い頃の具現であるかのように思われた。」という語りに伴われている。ヒースクリフがこの頃、キャサリンとの合体を予期することができていたという事情があるにせよ、彼に復讐を放棄させたものは、自分とキャサリンの資質が、未来を生きるはずの次の世代に受け継がれていることであったことがわかる。復讐という破壊力は、自己回復を可能ならしめるはずのものである。未来への動きの中に、その威力を失うことを余儀無くされたのである。

とあらば我々は、疎外と死と地獄と牢獄に苦しむ人々の救いを考える時に、過去への回帰のみでなく、積極的な未来への脱出の動きがあるのではなからうかと、今一度彼らを見直してみねばならぬことになる。

キャサリンはエドガーとの結婚を決めた時から「自分を越えた自分の存在」（九章）があることを知っていた。地上世界に完全に閉じ込めておかれては自分の生命は無意味であると思い、大宇宙が自分の生きるべき所であると考えていた。今、死近き時において、彼女の眼差しは「もっと向こうの、はるか向こうの——いわば現実のかなたをいつも見つめている」（十五章）ものとなる。キャサリン自身、自分は死んで「みんなとは比べものにならない

ほど遠い高い所へ行ってしまふ」（十五章）と言っている。キャサリンのこの言葉は彼女が死んだ時、ネリーによって今一度、正にそのまま繰り返されそして「彼女の魂は神と共に我が家にあるのです。」（十六章）と続けられている。肉体的な死は彼女にとって、彼方へと飛び上がるバネなのであった。ヒースクリフが未だ地上にあるが故に、キャサリンはなおも宿無しの生活を続けねばならなかった。だが彼女は、死ぬことによって、自らのあるべき高みへの第一歩を得ていたのである。しかしまたキャサリンは、死における超越を語っていると同じ言葉の中で「私が地中に居る時に」（十五章）と言い、「地下において同じ苦悶を感じるでしょう」と言い、「私を墓から引きずり出しておくために」と言っている。彼女は死して超越することと同時に、死とは地下に眠ることであるとも考えている。彼女の死においては、地の下がすぐさま天の上と結び付けられてしまっている。とすれば彼女の死は、地獄の苦しみを経た後の天国の生であり、肉は地下にありつつも魂は天上に存在するという新生への入り口であったのである。

キャサリンと一つにならんとする「唯一の望み」（二三章）を持つヒースクリフの腕きも天国への腕きであった。キャサリンとの合体が近きことを感じた時、彼は大変に喜んでいる様子の人々に見せ、「きのうの晩、私は地獄の敷居の上に居た。今日の私は、天国の見える所に到っている。」（三四章）と語っている。キャサリンのベッドに横たわり、荒野に向かって開いた窓の下で目を開けたままで死んでいるヒースクリフは、自然なる宇宙空間へ解放されているであろう。キャサリンもヒースクリフも、肉体的に死ぬことによって、生中の死から死中の生へと移行しているのだ

ある。魂の地獄の後に、自分自身を回復した天国を可能ならしめた彼らの死は、この世の全知識を知った後の苦悩を忘れさせてくれるものとしての、マンフレッドの死のスケールと解放を思わせる。

第二世代においても、自己喪失の中に注意深く未来への布石がなされている。ヘアトンが文字を読もうと努力することは、剝奪された知性を逞しき身体の中に奪還し、本来の彼を回復しようとすることに他ならない。キャシーが初めて正式に正面からヘアトンに和解を申し入れた日が、復活祭の日曜日とされていることにも作者の意図は明らかである。ヘアトンにおいて知と肉が合一され、二人に本来の家と財産が戻った時、そこで彼らは新年の元旦の日に結婚することとなるのである。小説の結末近くにおいて二人が本を読んでいる状態が、彼らは「子供の持つ熱心な興味」（三三章）を持って学んでおり、「成熟の持つ醒め幻滅した感情を示してはいなかった。」と表現されていることは、ブロンテが、新しい未来を切り開こうとしている時点にある彼らの子供時代に対し、暗い面を切り捨てて明るい面のみを付与しようとしていること、および、その明るい過去を彼らのこれからの生活に投射しようとしていることが感じられる。

未来への動きは、登場人物一人一人の中に見られるばかりではない。第一世代から第二世代への移行そのものが、本来的に未来への動きである。幸福なる幼年期、社会の手が及んだ時に始まる自己喪失期、そして業火で焼かれた後に得る新しき生への甦りの時期。これらの三時期において第一世代と第二世代は同じパターンを示す。しかしこのパターンにおいてのみならず『嵐が丘』には、二つ

つの世代を重ね合わせたり連続させたりする要素が多い。キャサリンの死の日がキャシーの誕生の日であることは、生まれ変わりを思わせる。勝手に一人でペニントン岩を探索しに行ったキャシーの姿がハイツの中で捜し当てられた時、彼女は母親の椅子に座ってヘアトンに話しかけていたとは、キャシー、ヘアトンとキャサリン、ヒースクリフの二組の男女の同時投影である。「娘が母親の第二版にならねばよいが」（十五章）とロックウッドに語らせていることも、二つの世代を対応させようという意図を示す。

しかしキャサリンとキャシーが厳密に呼び分けられていたごとくに、二つの世代の間には「連関と共に区別」（十七章）が存在している。目は確かに母親のものであった。しかし白い膚を持つキャシーには、否定すべくもなくリントン家の血が流れている。キャサリンがレイディになるうとするのは一時の迷いにすぎない。しかしながら「私の名前はヘアトン・アーンショーだ。そして私はそれを尊敬するようにと君に忠告する。」（二章）といい、「私の父はスラッシュクロス・グレインジのリントン氏よ。」（二一章）と言うヘアトンとキャシーには、真正の家柄意識と誇りがある。ハイツに居たキャサリンは、六才になった時初めてグレインジという外の世界を覗き見た。しかるにグレインジに居たキャシーにとつては、ハイツの方が初めて知った外の世界なのであった。キャサリンはかつての部屋の窓辺の樅の木を使って、ハイツの中へ入れてくれるようにとロックウッドに頼む。しかるにキャシーがその樅の木を使うのは、父の死に目に会おうとハイツの外へ逃れ出た時である。キャサリンとキャシーでは、内と外の方向が逆である。キャシーはヒースクリフに「あなたの今までの

すべての人生において、誰かを愛したことはないの。ねえ叔父さん、一度もないの？」（二七章）と尋ねている。そしてヒースリフヤリントンに「許す」（二九章および三四章）と言っている。愛や許しにおいて、彼女は教えられたキリスト教に従った見方をしている。そして彼女の思い描く天国は、光と風と鳥のさえずりと緑のそよぎに満ちた夏の日である。リントン・ヒースクリフの天国と一緒に語られた彼女の天国は、荒野において実際に起こる現実の一日でありうる。<sup>注8</sup>だがキャサリンの方は、天使の居る天国は我が家に非ずと泣き、ヒースの中に降り立った時に喜びの涙を流している。ヒースクリフの方も「復讐することによって神よりも大きな満足を得るのだ」（七章）と言っており、さらに「私はほとんど私の天国に到達している。他の人の天国など全く無価値で欲しくないものだ。」（三四章）と述べている。「私の天国」がイタリックスにされていることからしても、第一世代の思い描く天国は、既存のキリスト教を越えた彼ら独自のものでなければならぬ。死して亡霊となって荒野を歩き行く第一世代と、知と家と財産を回復してグレインジへ移ろうとしている第二世代とは、共に地獄の火で焼かれた後に天国を得た者達である。だが一方は既存のものを越えた自らが宇宙へと突き抜け、もう一方は現実の社会と文明の中へ帰属しようとしている。

＊

エミリは荒野を離れては生活できぬ人であった。学校といった秩序の中に入れられてしまうと生気を失ってしまう人であった。

家庭教師先の家庭とは折り合って行くことのできぬ人であった。彼女が世間に対し、ぎくしゃくとした関係しか持ち得なかったであろうことは、ゴンドルという物語の流れを借りてはいるものの、出版を意図していなかったがために、彼女の心情が吐露されていと思われる、彼女の詩の中に明らかである。

いな、輝かしい天使よ、語れ、

なにゆえにわたしがこの俗世を放棄したかを告げよ。

なにゆえにわたしは耐え忍び、

人みな歩く凡俗の道を選じたか。

富も権勢もひとしく意にとめず――

栄誉の冠も快楽の花も忘れて

人知らぬ道を旅しつづけたか。

（一七六番）<sup>⑧</sup>

彼女にとってこの世は俗世であり、世の人の道は凡俗の道であった。我が外の世界に嫌悪を感じる時、彼女は内なる世界に向かわざるを得なかった。彼女は想像力に向かってこう呼びかける。

外なる世界は何の希望ももたらさない。

それゆえに、内なる世界をいやさらにわたしはたとふ。

おまえの世界には、術策も憎悪も疑惑もなく、

冷たい猜疑も湧かない。

ただおまえとわたしと自由とが

ゆるぎなく支配する国よ。

（一七四番）

社会一般のものよりも、我がものを価値ありとすることは宗教においても見られる。「わが胸のうちに在る神よ、つねに在る全能の

神よ、」と我が神に呼びかけた後、彼女は、

もろびとの心をゆるがす数々の信条も、

むなし、いわんすべもなくむなし。

枯れ草のごともむなし。

果てしなき海に浮かぶ泡のごともむなし。

(一九一番)

と、人々に受け入れられている教義のむなしさを歌っている。そして彼女は、友人がハワースを尋ねて来た折、どの宗派に属するかということについて話していた時に、「それは神と自分の間の問題です。」という考え方に、「まさにその通り。」と賛同を示したという。⑩ エミリにとって、この世における教義・宗派の如何なぞ問題ではなかった。彼女は既成の社会や宗教の束縛から解き放たれ、自由の中に我が想像力の世界を打ち建てようとする人なのであった。医師にかかることを拒み、薬さえも拒否した彼女の死とは、死の中に解放と休息を得ようとするロマン的な死そのものである。しかしながら彼女は、牧師の娘としてキリスト教の教えを知らぬはずはなく、そしてまた、ロマンティックな作家を好んでいたとは言え月刊雑誌を含む読書を通じて、また短いものであったとは言え学校教育を通じて、あるいはまた誇り高き伯母ブランウェルの躰を通じて、当時の社会情勢、拘束的な社会規範、立派さを第一とする社会常識を知らぬわけはなかった。彼女は個人としての情熱と、社会の枠組との軋轢に悩んだに相違ない。しかし彼女は、この世に住む者として、自己と社会を調和させねばならなかった。外なる社会の侵攻により個人が侵されるが、その個人にあるべき内面を回復した時に新しい生へ止揚されるとい

う流れにおいて、および、自然の方へ広がり行く第一世代と、文明の中に安定を得ようとしている第二世代という結末の並置において、つまり激しき自我世界がかく収束されたことにおいて、我々はエミリ・ブロンテ自身の、情熱を飛翔させることを望みつつも、内と外、個人と社会、情熱と枠組とを調和せしめんとする努力を見出すことができるのである。

\*

① C. Day Lewis, *Notable Images of Virtue*, Folcroft, p. 1.

注1 この小説そのものは、ロックウッドの訪問から始まっている。しかしネリーによって語られている嵐が丘世界でのでき事のうちで最も古いものは、ヒースクリフが連れて来られたことである。

注2 この小説では、母親をキャサリン、娘をキャシーと呼んで、両者を区別することにする。

注3 ネリーは信用の置けぬ語り手であるという見方をする人もある。例えば、John K. Mathison, "Nelly Dean and the Power of *Wuthering Heights*", *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. XI 確かに彼女には状況呈示に不十分な時がある。しかし本文に述べた理由から、信用できないという見方には賛成し難い。



② *Pride and Prejudice*, Chap. 1.

③ *Dombey and Son*, Chap. 27.

④ *Vanity Fair*, Chap. 3.

⑤ *Mary Barton*, Chap. 7.

⑥ *The Warden*, Chap. 2.

注4 私が引いたこれらの作品はそれぞれ、舞台としてゐる時代と執筆された時代という二つの時代を持っている。そしてそれ

らが、『嵐が丘』の時代よりも後になつてゐる場合もある。しかしここでは、時代を広くとらえ、エミリー・ブロンテが生きていた時期を主眼に置き、これらの作品が彼女の頃の精神風土を反映してゐるものと考えゐる。

⑦ Martin Farquhar Tupper, *Tupper's Proverbial Philosophy*, Auburn, Alden and Markham, p. 106.

⑧ David Cecil, *Early Victorian Novelists*, Constable, p. 148.

⑨ F. R. Leavis, *The Great Tradition*, Chatto and Windus, p. 27.

⑩ Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*, Hutchinson.

⑪ Terry Eagleton, *Myths of Power*, Macmillan.

注5 しかしながらこう述べることは、復讐劇における心理性を否定するものでは決してない。

⑫ C. P. Sanger, *The Structure of Wuthering Heights*, Hogarth Essay.

注6 看病からの自由、妻という名からの自由という意味あいが強いものであるが、自由という語が混入するところに、キャサリンとヒースクリフ以外の人におけるイメージの弱化が見られる。

注7 この小説において窓が意味するものについては、Dorothy Van Ghent, *The English Novel: Form and Function*, Harper が示唆的である。

⑬ Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of*

*Mind*, Yale, p. 344.

- ⑭ Raymond Williams, *The Country and the City*,  
"2. The Problem of Perspective", Oxford.

注8

26章においてキャシーはリントン・ヒースクリフに「今日はあなたの天国のような日よ。」と言って彼を力づけようとしている。この言葉にも、第二世代の思い描く天国が実際的なものであることが示されている。

- ⑮ *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, C. W. Hattfield ed. Columbia, 詩の訳は、河出書房版の松村達雄訳を用いた。

- ⑯ Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*,  
John Grant, p. 126.